

里見八犬傳 拾三編 卷廿七

13
709
75



門 709
卷 75



明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第九輯卷之二十七

東都

曲亭主人編次

第四百四十二回

兩腋を証て辰巳誑簡を貽ま
故事を尋て政元名畫を疑ふ

却説巽於兔子當晚絶て久しき侶宿をまゐる枕と枕の並頭の蓮花の優るぐ横の
袖比目魚の鳥の翅の異るを我一句彼一句相譚以曉を愉々快々巫山の雲の湖波の
岫より起て夢を載せ楚臺の雨の恋憐の意を打て人も知らず蛺蝶花の戯まこく
屢露を食れども不飽を蜻蛉水の尾を滯して桔槔をまども奥安を盡ん心蕩け魂
浮る温泉の卿合歡の花醜態癡情送る禁せざる曉天の稍疲勞して初て睡不就
去るいふし七天の明るを知らむ日の高きと三竿許外で晝飯炊く時候夫婦驚
覚俱不起出で巽の速く戸を閉て火を打て茶を煮る程に於兔子の湯を汲み漱き

八犬傳九輯卷之二十七

文叢書

顔を拭ひ手脚を洗ひ。鑄醬を添て梳髪を熱脂白粉の故きを温れて新うまると二十
婦人の化粧生平より意を用ひ。身装約一晌有餘を造り果折酒肆の小廝
味噌醬油の所要を來ひ。於兔子の巽小商量し。先山幸の裁判の歡ひを
いんとて昨宵樵六を遣下措る。那漆罇を遣して是美酒三三好と腐を擇鶏卵三
十を苞ふとと來よ。と件の小廝の吩咐。小廝はあつ得走りて程もあらず。三種
引提て來り來り。於兔子は是を小廝の齋と樵六許赴き。小樵六は宿醒を聊恙
ありはれ。谷を休り。宿野不在。當下於兔子樵六其酒罇を復饋。昨日夫婦
口舌の折撮合するより。風波風く理り。事の歡ひを云と演るを樵六聞あむ。その
歡ひの然るるを。罇酒菜を復き。熟親の介意。昨日も既ふひけり。
年中画額の下地を送る。咱も花主の身達る。那許の酒費。すを報ひせら
る中。うんやと固辭を於兔子に推禁めて。否。奴今來る。折の歡ひを。

る。不も。身。小。憑。人。と。思。ふ。我。ま。あ。の。め。を。下。り。叱。ら。せ。受。多。ひ。ね。い。て。と。樵。六
才。の。點。頭。で。其。意。も。既。の。精。一。々。云。那。頑。童。の。更。さ。る。昨。宵。も。身。を。示。さ。り。如。く。其
義。さ。る。胸。安。れ。意。ふ。這。來。田。の。山。院。然。る。美。麗。の。行。童。あ。ら。甲。も。見。こ。も。見。こ。と
云。噂。必。高。く。今。ま。で。聞。く。さ。り。い。必。是。老。る。狐。飲。狸。の。主。を。弄。ぶ。生。変。化。の。疑
る。咱。等。山。小。入。て。木。を。伐。る。折。動。ま。れ。山。鬼。の。爲。小。嚇。さ。る。と。間。と。あり。登。時。准。備
火。銃。で。多。く。其。方。又。推。向。て。空。丸。を。放。ち。う。ち。襖。へ。其。妖。怪。立。地。小。退。き。去。ら。ま。ま。の。を
る。夫。の。故。小。我。獨。夫。小。あ。ら。ね。ど。も。年。來。這。鳥。皆。銃。一。挺。を。貯。持。り。明。日。より。一。山
掙。と。夙。果。七。か。り。來。て。那。妖。物。の。來。り。を。等。と。必。よ。狙。撃。て。其。本。體。を。見。さ。る。
巽。妻。の。惑。ひ。覺。て。い。う。お。身。の。胸。安。く。ら。い。咱。等。小。任。一。ひ。ね。と。も。小。捕。さ。る。と。説。誇。を
於。兔。子。の。急。小。推。禁。め。て。开。小。勇。を。更。さ。る。尚。那。頑。童。が。変。化。を。真。の。少。年。と。え。ん。か
人。を。害。ふ。罪。重。り。と。思。ひ。後。悔。を。い。ふ。と。及。ぶ。を。殆。き。所。行。で。は。す。や。と。詰。ま。へ

樵六冷笑ひて然るの遠慮なきや聞ふ頑童が宿所交加來ぬ又朝き走又
 晝るる日景傾く下晡の時候なきのれゆりと思ふ地狗天狗の陰物れは且
 つも夜宗さま是其真の人なる明證と做す足る者多し況や我這暗も相一相
 る不及ひて他へ變化欲真の行童欲いふと謬ひてその美も心安り下と解
 且て於兔子の歡び信で然るべし身も任して明日よりと山掙せ疾果来て埋
 伏せせらるるを願ひけは奴が先の見出さるべ走來て疾お身も報人時分を違へ
 るるを謀一合も告別て於兔子の宿所へ還りけり然る異に這計較と告らる
 さま一毫も料り知るべきなりまけども於兔子樵六といふ西魔王の佛心を打
 破らして年來修せし善行と平暗の澳へ放下ありし神の祐も戒之疑ふ故に
 畏れも甚だ似るる鳥と俗中も云於兔子が日毎の薦る隨意酒を喫も儲を討ち夜へ
 亦夫婦枕を雙て淫酒の樂を耽るるを賣買の妻も暮るる借財の増も増るるも

思へなまてふりくく伴てて月を定めて人の錢を借て還さる是より後義父九里平の屋
 の精進甚だ家廟の家火の要を蔵りて架棚の足ぎを補ふる墓請も藥師
 請も排斥て見せぬ知又那神童の詠る虎の画額も等閑で只虚々言て過共
 自餘の画額は故に不賣畫まで敢画が然に異が恠まふ不似不善の根返るも嫉妬
 懲て内と怕も本性浮薄の癖を於是子へ只那男色を防ぐと思ふを是より後
 村長より召し病着の假托を辭せ日毎の宿所不在疎遠十四五日の及ぶ程有日
 又村長の老伎が小廝をよめり頃日なを來まぬ秋も早半過て月瞻る頃ふ
 るけし編入る衣多あり央錢の望あふ開へ左も右もしまるらん明日の風て
 來ぬぬのつとや人を族さるも涯りありと怨んぐる口状の稜みあらぬ於兔子へ
 今又固辭の由ら他央央錢の前借もあり然るも萬事差配の任する長の宮眷の
 憎むるべきる債の類を寛解る便宜あるをむと尋思をあらふと答へて答て

躑躅して返りし。あまの美を巽ふ告知ら。其次の朝辰禪時候より。於鬼子の絲織の小裏を
抱きつゝ立出て。村長許赴く折。先樵六の宿所の立寄て。情多小告る。奴家今日八侍との
情由あり。己をいひ長殿許召す。あけの目暮て還らん。故小身憑心侍了。那頑童
奴久し。これども出。来ぬをいも。見ぞ。奴家。在らぬを幸か。引入れ。争何せん。願ふ
お身。今日一日の。山樵を骨休し。我身代。留守。其立舞の。二。三百銭
まれば。ぬせん。と。憑心。樵六。聞果。を。開。あ。る。の。り。然。い。て。立。舞。貴。て。何。せん。意。不。我
怒。お。身。の。宿。所。の。神。輿。を。居。て。做。さ。さ。る。日。消。さ。兼。令。疑。ふ。那。妖。物。も。出。来。好。々
我。せ。術。あり。今。より。情。地。の。准。備。七。主。の。宿。所。の。頭。を。守。つ。も。便。宜。の。樹。蔭。飲。底。間。飲。柴
垣。の。裏。を。と。小。懸。れて。待。小。さ。る。縦。地。狗。ま。れ。天。狗。ま。れ。目。の。見。あ。る。の。り。と。小。懸。り
捉。る。段。我。小。在。と。任。と。お。身。長。殿。許。疾。あ。た。多。人。と。の。と。を。六。於。鬼。子。の。舎。火。點
頭。て。念。六。妙。を。存。も。右。も。お。身。任。侍。せん。脱。落。の。る。去。ら。た。と。情。語。果。も。尚。遺。る

詞の露をかけた憑心。秋の日影の朝曇。早慶。有る。を。瞻。仰。る。心。も。空。の。叢。雲。の。脚。を。た。と。せ
村長の宿所。と。ぞ。い。と。ま。き。ける。あ。の。日。巽。の。妻。の。留。守。し。と。單。徒。然。の。堪。ま。さ。る。錢。あ。ま。さ。れ
酒。の。の。喫。ま。で。朝。より。出。て。店。舗。不。在。り。一。旬。有。餘。等。雨。中。足。ら。ず。り。く。る。十二。生。月。の。画
額。を。此。彼。と。画。く。程。小。秋。の。日。を。短。く。と。下。晡。あ。り。し。時。候。那。行。童。忽。然。と。來。て。履。衣
頭。の。在。と。な。よ。ま。主人。我。詠。う。虎。の。画。額。の。の。を。と。向。れ。て。巽。の。駭。ま。着。て。頭。を。擡。つ。陳
ま。さ。る。那。画。額。の。更。へ。も。仰。付。ら。ま。次。の。日。より。小。可。風。寒。不。冒。さ。れ。て。昨。日。ま。で。臥。下。り
あ。の。い。も。遣。ア。も。中。の。い。ぞ。願。ふ。る。不。又。十四。五。日。の。用。捨。を。仰。さ。な。さ。る。の。り。と。う。ち。勸。解。を
行。童。所。つ。恨。る。色。も。然。ぞ。あ。ら。む。ひ。く。故。夫。婦。の。浮。薄。の。本。性。我。知。ま。し。と。侍。る。大。事。を
課。せ。ぬ。あ。ら。ぬ。が。も。汝。等。猶。幸。ひ。小。那。舊。悪。を。懺。悔。七。新。の。善。ま。く。欲。ぬ。一。善。既。不
進。む。と。と。衆。惡。退。く。自然。の。天。理。是。より。彼。岸。小。到。る。べ。し。慈。航。遠。き。あ。ら。ぬ。我。佛
勅。因。て。試。う。り。小。原。の。罪。灰。深。重。ま。れ。鬼。神。衛。る。國。法。借。さ。さ。我。慈。悲。及。冤

家と做て始の弥増罪悪ハ則是業果之結る鳥爵の魁兒ハ神筆名画を取せし疑思ハ
 凡夫ハあらん欲是の貨を抱くハ與他御血を見禍賢者を禁錮の路啓ける福多
 申ありて巨鱗東洋の還るものも貴人蔽衰の世で憐まで得がはれ代員と愛るハ與年來
 民の膏腴を致する奢侈を以て儉の一端の做るまは神祇の勸懲佛陀の慈悲多夫
 機を教養なるも若們は是中の骸骨圍王廳下の餓鬼を今さら亦何ぞ知た
 已るんくと丸彈と軀と踵と旋とを供の如く行程の異ハ一句も答の由多且羞且畏れる
 背の冷汗と流るる頭を低て默然う介程の伴の行童の異ハ宿所を立去つてゆくは
 百歩の及ぶ路の這方の冬青樹の蔭の張ふ一人あり是則別るハ亦那出幸樵六の
 寛済者一鉄砲の火蓋を鎖て挂と放其憐ハ一件の行童の背を胸まで撃抜けん
 一聲苦と叫びも果を身と仰反らして仆るの當下樵六鉄砲引提をく樹蔭を立出
 死活のいと走寄る程もあらん罪も亦ある光景の胸を凌ぎ吐きさるる身と脚ら
 出る心の慌ハ一單底草履穿あを走して其里のゆり相るハ較まハ一那行
 童も今村長許う来あけ於兔子ハ胸骨打碎して鼻より口より吐き
 鮮血の襟に帯さ韓紅糸染做る窮所の銃傷のふと不死の藥も苗名三魂
 既ハ天の歸り六魄輒地ハ墮て又活くもあらざれば俱驚く樵六引提鉄砲投棄
 居の挂と膝組あを胸と敲き聲戦を却行殺し思ハ魔魅逃さ思ハ
 死於兔子の刀身の我銃頭かかる死ハ又狐狸の妖術也其人多るその人を今幻目見
 たる歎きまらぬ怪ハ過て及ぬ差池失策面目も異主怨と推量らる
 麼いせんまらぬ空に影と披起ら返見ても甲斐を後悔越小達さ
 呆して一霎時忙然事情を知りも巽ハ宅眷と亡れる怨の堪ぬ胸逼
 眼血曇り歯を切ると握拳の遣う方も怒り不儘る聲高小這奴大胆妻の
 雙今さら何等の分説あらん覺期をせ罵も果を脚を飛て丁と蹴蹴ら

出る心の慌ハ一單底草履穿あを走して其里のゆり相るハ較まハ一那行
 童も今村長許う来あけ於兔子ハ胸骨打碎して鼻より口より吐き
 鮮血の襟に帯さ韓紅糸染做る窮所の銃傷のふと不死の藥も苗名三魂
 既ハ天の歸り六魄輒地ハ墮て又活くもあらざれば俱驚く樵六引提鉄砲投棄
 居の挂と膝組あを胸と敲き聲戦を却行殺し思ハ魔魅逃さ思ハ
 死於兔子の刀身の我銃頭かかる死ハ又狐狸の妖術也其人多るその人を今幻目見
 たる歎きまらぬ怪ハ過て及ぬ差池失策面目も異主怨と推量らる
 麼いせんまらぬ空に影と披起ら返見ても甲斐を後悔越小達さ
 呆して一霎時忙然事情を知りも巽ハ宅眷と亡れる怨の堪ぬ胸逼
 眼血曇り歯を切ると握拳の遣う方も怒り不儘る聲高小這奴大胆妻の
 雙今さら何等の分説あらん覺期をせ罵も果を脚を飛て丁と蹴蹴ら



残 忍 吹 毛
 求 疵
 短 慮 窮 賊
 智 出



被 御
 召 繪
 額

輾せうろく樵せうろく六む身み行ゆ敵たけ對たい甚し泥どろ塗ぬ々々と張たと脚あし縮ちぢりり春はる蠶こ起おこ直ただらんと
 ぬる程ほどの異い猶なほ怒いかの勝かち勢いき以もつ禁いむくもあまされば送おくる鍊くわん砲ぱう拿とるもももとも
 板いた閃ひらては樵せうろく六む頭あたま並なら位ら礮ぱうとと撃うちまつた拳こぶしのの牙はもも不ふ祥しやうの時とき運うちまつた樵せうろく六む百ひゃく曹そうよりより眉まゆ上う三さん寸すん打う破ぱら
 きてきて突つ見み骨ほね碎くだけつるる必かな死しのの深ふか瘡かさのの一ひと霎しやく時ときもものの堪たむらぬらふら仰おほ及およびびてて儘まま息いきの
 絶たゆり然しかにに異い妻さいのの冤あや家かとと立た地ぢのの較くら量りやう果はるる事こと遂すううふふ似にれるもも又また思おもへば
 後悔こうかいありあり樵せうろく六む豫よよりより那な行ゆ童どうをを狐こ狸りのの妖まじ怪かいるる思おも決けりり見み識しれる行ゆ童どうの
 來きぬる見みてて這こ鑊かく砲ぱうまでまで方かた僅わずか撃うちまつた欲ほしし妖まじ怪かい前まへ知し術じゆつありあり那な身みのの支し
 免まれて折をりり村むら長ちやう許きょかかるる來きぬる於お兔う子こをを撃うちまつたその怨うら復かへするあらむらむらむらむら支し
 差さ錯さく出でるるとと人ひともも樵せうろく六む我われ宅たく着ちやくをを致いたする鮮せん死しのの罪つみ人ひと結むす紐ひも領りやう主しゆ許きょ稟りやう必かな首くびを
 刎ならまてて怨うら復かへする易やす易やすくくならぬら我われ一ひと朝あさのの怒いか無なしし捷さつ窮きゆう野ののの深ふか瘡かさ也なり他た死しする
 照て入いるる身み及およびび疑うたはなする於お兔う子こ樵せうろく六む非ひ命めいのの死し我われ野の為ためとといいふふ何なにぞぞ

よよくくのの鮮せん人ひと也なり理り持ぢりり非ひ陥かんささまま牢らう獄ごくのの繫つ糸いと也なり呵か責せのの苦くもも罪つみるる罪つみのの
 死しんん折せ悔かいのの八はち十じゆ度ど百ひゃく十じゆ度ど脛しんとと咬かみみ及およぶぶとと左ひだりもも右みぎももああのの年とし來きた幸さいるる上うへのの
 幸さい多たううけけ家いへのの艱がま福ふく鬼おにのの跡あとをを繼つぐぐとと今いまのの危あや窮きゆうのの幸さいとと書かき
 喪さうふふこれこれああのの日ひ月げつのの照てららままああむむ他た御ごのの走はりり厄やく解かいけて今いまのの真ま苦く後のち竟つひ昔むかし
 語かた小こ做ぞままままのの幸さい多たううままとと吐つのの回わい吐つのの答たてて遠とほくく先ま四よ下げをを見み延のまま秋あきのの日ひ早はやく
 西さいのの沈しづんでんで點てん燭じやく時とき候こうのの多たうう一ひと田でん舎しゃ只ただ素すよりより人ひと稀まかかてて但た來きた絶たれればば知しるる者ものああらら折せりここ
 よよけれれとと偷ぬす歩ぶまま已おの宿しゆく所しよかかるる入いてて猛まう可か計けい較けうむむ奸けん智ちのの賂ろ簡かんいいまま画えのの素す版ばんのの額がくを
 引ひよよ甘あま筆ふでをを添そへへ画え研けんのの池いけのの淺あけれれとと深ふかきき伎ぎ倆りやうへへ更さら又また幾いく層そうのの罪つみをを造つく言ことば思おもひひのの隨ま寫しやう着ちやく
 てて筆ふでをを捨す身みをを起たしし絶たのの逆さか旅りよのの准じゆん備びもも那な無な瞳とら子このの虎このの旁たがひ軸じやくをを袱ふくのの裏うらをを背せ負おかかてて立た坐ざを
 去いてて又また思おもふふ我われ頃ころへへ酷く錢せんのの憎にくままてて鍔つ一ひと貫くわんのの餘あま財ざいああらら衣い物もののの皆みな四よをを被かけけられれてて入いるる
 鮮せん舖ぷのの庫くら在ありり身み行ゆ客きゃくああるるもも明あ日にちよりより七しち日にち何なにぞぞ長ながきき旅りよ宿しゆくのの盤ばん纏ぢんせせんん也なり

我冤家山幸熊六といぬる年。子先を妻をさへ喪ひて。單身より銭ある者なり。妻を咬
る。磔と送り人を殺さし血を見るべし。前路の駝貨外なるも。那奴宿所を極探らば。然る所の盤
纏あるん。噫。介也。肚裏小出来心多。賊計賊智の筆帳既決り。久。悄地背門より走去。
案内知る。推六が宿所の赴き。鎖を破ると。閃と内小找入て。東窓より刺し。月影を燭の
左右。小櫃大櫃衣葛籠漏さ。傍り討ら思ふも似む。金子二両三分。永樂錢百有
餘あり。獨居るれば。賊難を怕れて。外預け。飲骨折甲非ある。所爲る。無の優せり。懐
夾めて。又衣物の水の入れを。探登して。大袂の推裏と。楚と搭駝と。皆笠面を隠せ。標
出る。造化と。上盧が散る。浪速津を心當ふ。その通宵走り。知る者いも。さるりけり。余
程の天明。後小巽。近隣の莊客們。於兔子樵六の横死の亡骸を見出し。檢馬聚の
又巽が版額。高なる。貽翰を見出し。事情を。随即村長小告知。俱の
領主の訴。実檢使を請稟。志。久。まの日。実檢使出て。來て。件の男女の亡骸を

檢出る。於兔子。則銳瘡。樵六の杖傷。且巽が貽翰。小道り。本郷の樵六。我妻
於兔子。姦夫。その不軌。既發覺る。不及て。男女謀。合。相携て。今宵逃去ら
ま。欲せ。己未。逃。趕。鬼。出。鑊。砲。を。淫。婦。於。兔。子。を。矢。場。小。敷。倒。巽。樵。六。
這勢。小駭。き。怕。腰。打。抜。して。亟。逃。ひ。逃。る。己。暮。直。走。鬼。り。鑊。砲。を。て
他。が。眉。間。を。捷。窮。野。小。堪。き。う。けん。か。下。枕。小。息。絶。當。地。方。を。去。ら。妻。敵。を。擊。果。
去。愉快。似。れ。ど。生。拘。て。訴。き。け。後。悔。臍。を。噬。ども。及。む。事。の。不。祥。世。を。觀。む。れ。是。を
菩提の種。を。出家。し。身。を。雲。水。小。儘。せ。ん。思。外。る。願。近。隣。の。父。老。達。去。の。差。を
も。て。左。も。右。も。宜。計。ひ。入。る。一。仍。輪。如。件。箕。梨。屋。辰。巳。と。書。う。け。當。下。実。檢。使
是。を。見。て。則。近。隣。の。莊。客。們。小。巽。夫。婦。と。樵。六。の。出。所。來。歷。及。年。來。の。行。狀。を。詳。小
質。問。ふ。小。大。家。答。て。巽。於。兔。子。小。箇。様。々。原。西。國。の。浮。浪。戸。小。本。村。の。繪。馬。經。紀。箕。梨
屋。九。里。平。の。乾。見。小。做。て。讓。を。受。る。者。多。初。行。狀。宜。く。近。來。猛。可。改。め。く。

不怠の信者ありしより。五戒と持ち常精進し。夫婦雙宿共せし人の噂の聞えし。又樵六の當村根生の樵夫にて宅眷の既世を去り。今この獨居の鰥夫也。年來巽が賣買の画額の下地を造り送り。送るに特小親しくいふも巽が妻と情由あり。その美し知らばいこの衆口紛れありし。実檢使らち所て主君の聞えし。有司奉りて謝断せし。巽が持戒の念佛者なり。その妻淫奔の罪あり。その女奴夫と推雙て較果をくむ。あつたも良人とし。其妻を殺し。其故をありけり。惜むに樵六於鬼子に死して巽は逐電をられ。虚実を糾考する由あり。となく巽が往方を涉獵し。おて奉る。下を命せらる。是より村長の莊客們を部て。巽が往方を索る。その時後れられ。知る由あり。或は云件の樵六の性奸慳。神を敬す。亦佛を信其始の貧かりける。夫婦好きて人の稚子を求む。養育の事あり。其養育料の錢財を食入との所行られ。敢其子を憐れ。死なれ。又別人の稚子を鑿金求む。養育も。孰も一年半年にて其

子の死するより。一を殺し。やをむ。人の思ふ。その餘尚分知らぬ不義利を食りける。當は至らぬ。かかろく小貧り。人を小財を食む。貯禄あり。身は多し。頃世の客獨子の年八族九なり。夏川の階の瀕死。けり。骸を求む。三百七級。おぼせたる。次の妻の春の時候。樵六の妻の頭死。その身單あり。けり。是は必隱匿の報あり。と云。悪評を聞ふ。小業報も。足らぬ。あけん。那身。巽の杖殺され。且淫奔の悪名あり。所親といども。是は怖ま。況て巽が鬼子。浮薄。七伴。誑言。言行の齟齬。い。疑あり。事好む。村民も。樵六於鬼子。亡魂。市中。巫の駭。掛き。母。問。けり。於鬼子。啜醋。樵六が生憎。神佛の眞實。罰を。罪を。横死を。する。且巽が妻を。誑て。已。矢を。飾。り。邪智。奸悪。趣。まで。人。みる。知。る。こと。は。て。駭。怕。れ。惜。地。地。後。々。ま。見。孫。の。盛。言。を。あ。り。ける。是。より。又。不。く。る。まで。巽。が。所。在。知。れ。ず。西。所。の。家。を。毀。て。家。火。の。皆。没。官。せ。れ。於。鬼。子。樵。六。亡。骸。半。馬。其。野。を。棄。れ。て。餓。る。狗。鴉。を。肥。け。り。是。後。の。話。却。説。巽。其。夜。更。を。藥。師。院。

村を立去つて。徑路を求め。迹を埋めて。只管のいさぎ。六日數僅の程。して浪速の到る客
 店に在り。這津の相識のいさぎ。魚米の地。れ世渡易。け我妻の神童の教。よるて
 上達。ま。画を。と。口を。鯛。を。思ふ。ふ。より。月額。を。割。ら。む。則。其。姓。を。竹。林。巽。風。と。改。め。
 頂。髪。の。長。く。あ。る。ま。で。權。且。逗。留。あ。る。程。の。秋。の。果。敢。る。暮。果。て。冬。の。聲。あ。る。り。め。う。ら。坐。
 を。食。へ。盤。纏。續。る。ま。で。只。得。行。囊。を。解。啓。さ。て。嚮。小。奪。略。て。と。来。ふ。け。推。六。の。衣。
 裳。を。合。ひ。出。店。小。二。の。憑。ま。て。售。せ。て。又。三。兩。の。金。子。を。た。り。是。も。盡。さ。争。何。せん。
 先。屏。風。繪。を。と。画。ま。て。此。の。錢。の。做。さ。ま。を。紙。筆。繪。具。を。買。致。さ。て。得。意。の。虎。の
 画。を。創。り。ま。い。い。ふ。然。し。も。學。大。の。ひ。ま。り。け。已。画。あ。る。の。忘。れ。ま。く。學。び。り。け。已。前。あ。
 猶。あ。拙。さ。い。ふ。も。あ。ら。ま。備。我。の。迷。ひ。飲。と。思。ひ。復。し。又。画。を。只。虎。の。ま。あ。ら。ま。と。し。三。
 生。肖。の。獸。さ。ま。草。木。山。水。一。箇。と。し。よ。く。の。形。状。を。做。ま。者。ま。宛。小。児。の。塗。抹。似。れ。は。
 心。焦。燥。を。画。を。破。つ。て。推。圓。の。櫛。を。頭。を。傾。け。り。又。ま。胸。を。鎮。め。思。惟。る。自。裏。の。我。

画。極。可。進。て。名。あ。る。筆。の。差。さ。る。个。と。思。ひ。幻。術。を。行。童。が。幻。術。と。我。眼。を
 眩。惑。し。け。ん。介。ら。ら。く。の。携。来。み。け。那。無。瞳。子。の。虎。の。幼。軸。亦。金。圓。の。筆。の。あ。ら。ま。
 然。せ。る。價。直。を。る。た。り。の。飲。事。怪。し。き。小。過。と。思。ふ。今。さ。ら。心。許。る。く。身。の。端。素。紙。の。あ。ら。ま。
 と。疑。心。起。り。と。安。ら。ら。ね。の。獨。件。の。幼。軸。を。合。出。悄。地。の。開。き。て。眼。を。拭。ひ。眉。を。濡。し。壁。の
 推。當。て。堅。見。の。又。合。直。七。横。見。と。美。の。故。色。の。名。畫。を。始。小。毫。も。変。る。ま。今。の
 金。千。金。の。價。も。の。び。ま。あ。ら。ま。と。思。ふ。の。い。そ。れ。で。逆。旅。主。人。の。相。譚。の。這。扇。軸。を
 活。き。ま。る。昔。を。難。波。都。と。い。れ。け。今。の。鄙。備。漁。村。の。あ。ら。ま。画。を。好。む。者。あ。ら。ま。
 誰。も。よ。く。鑿。定。ま。玉。と。石。を。辨。知。る。其。画。虎。の。瞳。子。を。眼。筆。を。え。思。ふ。の。縦。直。を。鑿。
 と。欲。ま。る。者。を。聞。え。巽。風。を。失。ひ。て。然。と。虎。の。眼。の。烏。珠。を。加。え。買。家。の。分。を。た。と。
 思。ひ。の。又。思。復。日。が。我。那。行。童。の。做。戒。を。守。り。名。筆。を。加。る。時。這。虎。備。脱。出。て。人。を。破。ら。ま。

吹て疵を求る後悔あらん是亦容易き技なるべし。左の右の思難いありける程
 京の骨董店の主人、祿齋屋余市と喚ばる者、生活の興味の津来、昨日より這
 客店に在り、巽風活き、欲する金圖の虎の画軸の事を聞知り、隨即店主を介し、之
 巽風対面し、請て其扇軸と圖をのこす。這無瞳子の虎圖、偶故老の傳聞あり、倘
 果して真筆なるに價は世の至宝なり。聞り及び、せむいけん、東山御所様、善政茶と
 好ませぬの故、故書故画の御用毎あり、頃者も亦舊する和漢の名画の合數で後
 好まぬと安んず、小可が大家の經紀、各そのも續きふより、種々の名筆故画、幾幅
 飲まぬと安んず、都て御覽を歴せられ、御意は稱へ退けられ、小可がの年来西陣の
 管領様、殿えし出合を許され、御物の御用あり、毎の必来り、今番も亦那裏御家老
 香西大人の内意あり、この這頭の寺院の什物、古代の名画あるを、買ひ思ひ、来り
 る折も、まの値遇と料、はの穿申け、這軸は東西足、今又外を洗、紙又

要る。主を京師、伴ひかへて、我も續より、上るの憲覽、備らして、御意は稱へ、造化
 無類の利分、功銭思ひの隨多、賣買を仕らん、這議甚、説話且、巽風歡ひ、意外の
 出、取亦異議あり、詰朝、早天不起、早飯を果し、房錢を店小二、還へるを、那扇
 軸、推し、余市と共、京小赴き、姑且、他宿所、居り、且、裏、那行童、解示、さす。こ
 件の金圖の画の來歴を、詳し、寫し、相添て、次の日、余市は、遞與、余市、則、受合、と、速
 る、袴を穿、一、刀を腰、帶て、政元、邸中、多、香西、復、六、宿所、造り、人情、厚く、對
 面、請、て、件の名画を、管領家の、内覽、介、介、され、るを、願ひ、復、六、則、その画を、傳、來、の
 主、竹林、巽風、口、今、那、果、在、るを、問、余市、答、て、那、人、其、扇、軸、と、活、合、今、番、遠、方、多
 來、り、留、小、可、宿、所、在、り、御、覽、の、美、い、召、俱、も、易、い、余、市、異、日、御、沙、汰、を
 まで、画、軸、且、上、措、れ、い、り、余市、首、尾、と、好、息、連、り、額、衝、媚、嫌、七、宿、所、退、り
 け、不、題、京、管、領、政、元、其、裏、大、江、親、兵、衛、主、家、留、と、詞、敵、の、做、り、御、用、堅、削

らを疎と召す。徳用も亦試較の不觉、取て稍久く、病病と唱て頭を垂ま。あつるも
あつる冬、替して會社百一舉の時、欲得と念、七空を過る程、雪吹、姫の初冬の風會
されぬひ、持病の虫積又起りて、鍼灸藥餌の效あらず、其の故、給事の子房、高量七
徳用、堅削西師徒の加持を相志、かむひ、只願、請稟、政元亦已とを、隨
即、徳用、堅削と召して、讀經の用度を、宛行、まき、行法の力を、書と、姫の病、心平安の切を、奏
ま、命せらる。是、徳用、堅削、又出頭、折りて、姫の臥房、近き、在り、政元、徳用、法
壇、降り、折、閑室、召す、其、那、病者、輕重、法驗の、運速、と、向ひ、徳用、詭計の、厚、容
りて、然、姫、御病、悩、虫積、の、思、相、思、病、ま、其、法、驗、甲、非、多、く、い、ひ、い、ひ、と、い、ひ、
政元、訝り、て、開、亦、誰、と、想、ま、秋、と、向、徳用、然、姫、意、中、人、則、是、別、命、久、く、
留、存、ま、那、美、少、年、少、い、言、憚、り、あ、似、言、でも、館、他、と、ん、陪、堂、ま、假、ま、り、ま、り、姫
も、就、折、ゆ、偷、見、ま、り、て、御、煩、雜、ま、り、い、ん、要、ま、り、の、い、い、ま、り、と、認、ま、り、政元、聞、ま、り、と、く、

及て地談、及び、徳用のいひ、思ひ、其の後も、亦親兵衛と譜の、專、那、談、りて
廿、政元、の、堪、と、勃、然、と、和、僧、の、出、家、人、の、似、げ、も、多、く、何、と、照、据、の、門、の、秘、事、ま、り、
告、り、ま、り、我、親、兵、衛、が、文、武、の、才、を、愛、ま、り、と、召、近、り、て、閑、暇、の、折、の、陪、堂、の、ま、り、も、男、女
雜、居、の、甚、く、ま、り、至、り、と、知、亦、那、親、兵、衛、の、少、年、を、れ、も、禮、儀、の、武、士、我、ま、り、意、を、介、の、を
病、者、の、姫、の、い、ひ、と、偷、見、て、他、を、想、ま、り、倘、実、の、其、ま、り、へ、我、親、兵、衛、を、女、塔、と、祈、願、の
國、郡、を、分、取、せ、ん、と、素、より、望、む、野、漫、の、の、を、い、い、ま、り、と、審、ら、れ、徳用、の、句、も、出、ま、り、且、羞、て、
及て、主、君、を、恨、む、けり、浩、忍、の、一、個、の、近、習、が、次、の、間、我、ま、り、來、て、大、江、親、兵、衛、召、す、り、て、参、上、
聞、え、上、兵、政元、則、徳用、を、退、し、席、を、改、ま、り、又、親、兵、衛、の、面、談、を、文、武、の、陪、譚、の、母、の、如、く、既、に、
佳、興、入、り、折、政元、の、又、の、ま、り、頃、日、東、山、殿、故、画、を、徴、ま、り、の、ま、り、巨、勢、金、剛、の、画、虎、の
一、軸、を、我、の、内、覽、を、請、ふ、者、也、其、傳、來、の、趣、を、寫、集、る、我、関、を、其、言、都、怪、談、の、
過、ま、り、信、容、り、ま、り、和、郎、文、武、の、才、子、の、学、問、亦、博、識、の、圓、を、あ、れ、問、て、疑、難、を、啓、ま、り、

思ふより今日も亦見参を促し世俗を相傳へ昔巨勢金剛勅詔より畫
 馬の夜出て芳宜なる胡枝花を留置るをのふる外圍も相似る怪談あり
 ね我意ふ是等への画を神せんとて好事の筆を載るを奇を好む者
 傳へ故事の倣ふの木石とて造り古佛諸菩薩の言あり信らざる
 画像紙中の黒蹟面者皆を畫け面を素是其身羊體の者靈あり
 出たの虚談あり思ふ別亦以事飲甚麼ぞと問れて親兵衛
 衛然い未熟寡聞の人の知らぬ非常の奇事と論をくもいねも
 稟さるへ不敬のやいむ抑巨勢金剛光孝天皇の末葉也姓紀氏諱圓深普
 天子と號し又朝日阿耨梨といり宇多天皇の仁和四年勅依御所障子の
 儒の像畫き或は金剛の從五位下米女正其子相覽公忠公相主也其末葉を
 兼て佳聲有りと金剛傳をたて依傳の馬を畫きよるは是を画聖ををり

小説もいで来り或は又故廟の繪馬が夜艾の鬼をもち來せ走りき
 兔路今昔の策子の飲有と覚へ故物小靈あるに至りて画像と木石銅像の差別
 あづもいづは是を漢籍の考合い北齊の楊子華が馬を畫き馬の身をも動して
 長く鳴く奇異あり人相稱て画聖とまとい又唐の太宗の時李王猷が画
 羊の昼則欄外に出で草を齧夜則欄内小臥人其理を曉る者あり僧
 寧が白此幻藥をり画く所南海の倭國小洗馬山に海無んそ
 物を着る晝見とて夜隱る洗馬山の石磨を色に架物を添ふ又昼見とて夜隱る
 物小足らばとて這西高談の國俗の金剛が馬と白を同く七談る又唐の張
 僧繇が金陵の安樂寺に畫きける四圍の龍敢其睛を點せ毎の去是は點せ飛
 去ん人开を証すとて笑する者あり僧繇已をぬき其一點を須臾とて
 雲湧起り雷霆壁をうち破て其一龍雲を乘り天より失けりその眼を點せ

三龍今猶見。那寺亦在。是亦金剛。虎の無腫子。唱者。年を同じと談る。或又顧長庚。人物を画ける。都て其眼の點せ。人訝り。是を向へ即答て四跡。本妙處。傳神寫照。阿堵中亦在。是。等の張僧繇。その用心。同。七実事。足ん。他の名画。唐の爾本。立及。江都王。鄭度。王維。王墨。數人の如き。皆傳神の至妙あり。枚舉る。違あ。就中。一大奇。元人南邨。輟耕錄。卷第十一。温州監郡。其の一女。画像。新監郡。某の子と夫婦あり。及杜荀鶴。松窓雜記。不載。唐の進士顧頰。画美人。真々と媾合。七子を生せ。後画女。軟障。歸上りて。其画中。二子を添たる。よ。をい。文。及。具。せ。原文を照。紛。あ。い。是。等。の。理。の。事。の。あ。れ。を。詳。筆。の。載。と。遮。莫。盡。く。書。を。信。其。書。る。不。如。と。孟。氏。い。り。但。も。世。の。人。心。物。の。因。て。情。鍾。り。情。極。り。感。る。を。い。は。せ。と。

三伏の夏の日の名画の雪山を觀。清凉と暑熱を忘。冬冬の霜の朝。名画の花鳥を觀。夙々春の心。生。近日ある人の狂歌。逢。見。其。人の恋。を。い。は。せ。と。詠。る。も。あ。の。心。操。る。べ。壁。に。吳。道。玄。の。地獄。變。相。の。後。不。成。都。の。人。詣。來。て。觀。て。咸。罪。を。懼。れ。て。福。田。を。脩。猶。且。兩。市。の。屠。沽。其。肉。を。爲。の。集。ら。げ。又。李。思。訓。が。大。同。殿。の。壁。に。畫。ける。山水。を。宗。帝。夜。毎。々。水。聲。を。聞。く。と。あ。り。あ。の。通。神。妙。の。稱。譽。あ。る。が。如。有。佳。れ。の。名。画。の。奇。恃。を。い。は。す。必。無。と。ま。る。又。必。有。と。ま。る。ま。の。故。孔。聖。の。怪。力。乱。神。を。語。ら。せ。い。は。す。あ。の。一。の。あ。の。愚。按。を。稟。す。の。虚。実。の。知。る。よ。い。と。答。る。詞。の。花。あり。実。ある。辨。論。委。ま。る。を。政。元。听。け。嘆。賞。ま。て。適。愛。の。博。学。又。聞。我。憶。む。一。議。の。う。て。よ。れ。字。句。を。致。し。好。々。都。て。あ。る。ね。たり。見。ぬ。世。の。事。遠。き。唐。山。の。故。実。の。左。ま。れ。右。ま。れ。明。日。の。我。故。畫。の。真。偽。を。試。て。那。俗。説。を。破。ら。す。欲。む。開。け。後。の。事。を。知。ら。る。べ。大。誼。の。き。を。勞。ひ。て。あ。の。日。の。晤。譚。の。果。あり。

第四百十三面

虎眼小點と異風公文廳を鬧を
衆口を數ふて京北祿齋屋を誅す

却説左京北政元の日の大江親兵衛が暗譚果て退り後猛可の香西復を召て
ひきつゝ御ふ竹林異風とやらが内贖を請ふと聞え巨勢金岡が虎の画軸の一談の
就て我其異風の質問んと思ふよりありその所以箇様々々と意衷の趣を宣示
あて又の命を候まは明日巳牌時候の竹林異風を公文廳へ召よまべしよの餘の
事ハ候々有司の傳へて準備をせよと詞急迫し吩咐れ復六をあるは果ては
宿所へ退り候人走らるる那骨董經紀ある祿齋屋余市を召く下
知の趣を言示し時分を錯へて異風を召て参るべしと課まれ余市の既事
成りぬと思へ満面うち笑れり言兼志を退りける介程有司の復たは連
中各その下知を以て事の準備をせし程その日暮て明の朝余市の辰牌左側より

早く異風相俱して官領政元の郎の伺候の公文廳の局の外面在り等と約莫一
胸許既のりく當廳の有司の毎皆出仕ぬらんと思ふ程は警固の走卒聲高き
四條某の町る經紀余市許歌宿の逆旅の画工竹林異風在るや疾参り候
其の異風余市同音の異風風よりあは在り兼り候と答へ遽に身を起其件の走
卒這方へとく局の内をどまらせける當下異風先の杖を以ておそるくおの公文廳の光景を
見且ま有司左右の羅列れて官領のいも出るも又又司等の後方なる帷幕の裏面
の身甲ある力士三四十名のみ短槍鉤索を執るあり開か頭人とおの西個の武士
一對の武具を以て整々として和す又局の左右の警固の走卒三三十名各桿棒を衝立
四下の眼を配りて居り思ふ増する武備儼重なる威風の面を向くもあはれ余市は
異風のいもそのあるを安危のふと陪し思ふ胸安らぐ跪居り姑且く政元香西
復六を先立し一個の近習の大刀を執り屏風の背より出て来て儲の高座に着く

後方不侍一個の近習が那金岡の虎の画軸を管する中、蓋載て主君の側小指さ
 けり。登時有司聲を被て誰りある召人異風を疾参らせよと喚び、一個の青侍ある
 びて早く異風を喚升し、縁頼み来て来りけり。異風の目打拾申の時可る。銅色の
 尉、斗目衣、鳥紋紗の十徳の肩衰て陳て赤小豆色、小做りするも披り引れて、鮎く
 政の面前を畏る。昨宵、猛可の敗衣店にて買敷せる公服の下衣を、いづれ膚寒げゆ。
 鳥羽画の筆意、似たりける。是の一家の画風、故と思へ青侍の笑ひを忍びて、儘推居て退。
 程、一個の有司膝を打ちて、信と異風、向ひて竹林、異風、美れ、昔汝の内覽を願ひ、ついで
 故画の寄、館み、尋母の、言あり、具の答、稟まへ。といひ、異風、頭を拍けて仰
 美りの、那金岡の虎の寫真の事、家の口碑を、書寫して、憲覽、備せり。如く
 相違、あつても、いふと、まを、政元、うち、聞て、を、れ、異風、喬、小、你、進、らせ、る、那、虎、圖、の、傳、來
 書の、尚、その、眼、の、點、を、ま、ま、立、地、の、枝、出、て、人、を、傷、ふ、危、歎、あ、ん、と、の、其、要、神、小、て、價、を、貴、く

せん鳥の、唐山、の、介、る、例、の、壁、唐、の本、主、献、が、画、き、羊、の、畫、の、出、て、草、を、齧、む、夜、の
 欄、中、の、隱、ま、る、是、幻、藥、を、も、致、を、所、の、画、の、奇、特、の、あ、ら、る、よ、と、僧、賢、寧、の、看、破、り
 宛、有、信、れ、我、國、俗、相、傳、へ、昔、者、金、岡、の、畫、き、馬、の、夜、出、て、胡、枝、花、を、切、斷、た、り、誕、妄、
 件、の、羊、を、師、の、又、張、僧、繇、が、畫、き、龍、の、取、其、眼、の、點、を、人、強、て、點、せ、れ、其、龍、忽、地、枝
 出、て、雲、の、乘、り、て、飛、本、を、た、と、那、主、寫、ま、物、の、あ、れ、も、亦、幻、術、を、も、致、を、所、の、人、を、眩、惑、
 せ、て、み、か、ら、る、画、を、神、せ、し、豈、信、の、画、を、龍、の、理、あり、て、介、ら、ん、は、是、の、思、以、る、金、岡、の
 亦、み、か、ら、る、其、画、を、神、せ、し、欲、ま、虎、の、眼、の、點、を、七、時、の、人、を、愚、め、せ、し、る、え、开、の、左、ま、れ、右、も
 あ、れ、既、に、這、虎、圖、を、故、筆、鑒、定、者、流、の、示、し、小、金、岡、の、真、蹟、疑、ひ、い、は、む、と、い、う、あ、を、り、七
 東、山、殿、の、御、用、の、達、た、う、あ、れ、も、目、子、を、け、し、一、身、不、具、也、貴、人、の、御、物、の、做、ら、さ、う、爾、も
 是、繪、師、を、然、た、り、の、あ、ら、る、ら、る、目、今、這、虎、圖、の、兩、眼、不、宜、點、し、七、ま、の、廿、五、
 と、く、と、い、ま、せ、し、兩、個、の、近、習、找、し、出、て、件、の、虎、の、画、軸、と、准、備、の、筆、硯、を、俱、合、抗、り、鮎、く

異風が身邊に推着て疾仕れと促しけり。異風是の困り果ておそく稟を奉り御誼護て美
 なりひぬ然るも非如貴人御威徳の仰付まむとも或は又富家の千金を以て誘ふとも
 このひとをみ。非如貴人御威徳の仰付まむとも或は又富家の千金を以て誘ふとも
 這無瞳子の虎の眼の必し點まると傲られざる庭訓あり矧又師の異人の教のあまの
 叮寧まりければ今も違却はりかろう。御意不恃る畏れどもいそまの美を御許合ありて
 餘人の仰付まむを願ひなると辭ふを政元冷笑ひてやをれ異風父祖の敬言師の教
 誨といひを證據もるは孰も実事干て饒まぬ今別人を以て眼の點してさす奇特見れ
 加筆凡画の所以るれいと稟さん與の推辭するべし。約莫術者の幻術を以て猛獸を見し時
 或は糞汁獸血を澱ぎ樹に立地其術敗るるを。我既の準備あり尚又実の抜出て
 真虎の愛するともまぐ力士を聚合せ。前より其裏の幕の内在れば駈制する難くま
 開せる推辭の奇特を倡て上を欺きむ。其罪持の輕くま。牢獄の敷ききて徴さん欣
 然でも推辭の點せむと緊しく責て饒まぬ近習の毎左右より件の扇軸をもち扇を

筆と添よと推着れば有司等も共侶の異風をも遅滞せ。今その虎の眼の點してさす奇
 特見れども開の將來の失るれば汝の罪のあらざるべし。尚又実の抜出るべし未曾有の珍事
 開も又御意の頼りの美るれば及て御感の預るむ。但幻術を以て虎を出さば上を慢侮するも
 罪饒されどか。今術を以て疾點せ。推辭稟まぬ身の爲るま。後悔も及んやと
 論一薦む己され異風平伏する肚裏の左ま右さま思ふ。那神童の威を破る危き所
 爲るれも他果して神佛の化現のあり狐狸の變化を。那教も又是実と傲ま不足ら。後の出を
 怕まら。今の安危の靚面。只點するのあつと。言守思を。頭を拾げて御教諭感佩
 仕るぬ家訓及師匠の敬言。敢えある故。一具御誼を辨ひ有りか。今いも脱る路を。活物の
 眼の點する師匠も美りてい。右も仕らん。只その奇特の有無。素より家傳の頼るの
 試みるのつひに御用捨を。願ひければ。笈を引よ。懐紙を出し。量表の那行童。教
 られる眼の點する画法を。甲乙と寫試る。十二生。肖と。同く。是の毫も。志まね。心

易しと思ひつ。則件の画虎の隻眼の鳥珠を點と馳てき。出まを有司則受合てそが倭主
 君の皇圖を登時政元へ近習の命をそその旁軸を廳の柱に掛させ。衆人共これと觀る。小目
 子あり。一時も活るが如き猛虎の勢ひ名筆凝ひあり。今其睛を點て。勢ひ初半
 倍し。毛骨竦立可るれ。誰か感歎せざるべし。憶ぎ一霎時眷惚る。就中異風の神師の傳授
 失て我をかくる。と思へ膝の我ひも知らず。鼻春蟻ちりて俱に觀る程。怪あひ。那里
 とく。疾風颯と音。来て掛る。件の旁軸を吹翻し。鬮其但見る白額斑毛の大蟲。突然と
 ち見よ。来る勢ひ高峯を降ま。如く走り蒐り。異風の吼を愚然と噬締て振一振
 然散と漬る。鮮血と兵の噬断離ら。首縁頬の輾限る。軀へ仰き。小仆とけ。前未聞
 多一大奇怪。孰の辟易せざる。主從齊一立噪る。中々西復六を聲慌しく。立ち
 兵毎出よ。と叫ぶ。帷幕の裏面。小和え。力士の頭人種子嶋中太正告。紀内鬼平五景紀の
 須破也。俱に走り出て。連り。力士を薦め。是より先。景紀へ那身の撲傷愈。れば前も

に。磔を飛。力士の準備の糞汁と獸の鮮血腸を。漉ぐ者。滅掛け。短槍鉤索を操る
 士卒の駈止と欲ま。幻術の虎。る。され。穢物も破られ。又胎生の獸。る。投石器械鉤
 索。る。及ぶ。所。逆者。噬仆。れ。避んとす。ハ。跌滾。て。折。き。胸。を。折。き。腰。を。抜。し。命。を
 喪ふ。出沒迅速。進退。猛悪。中。る。も。あ。る。復。六。並。有。司。等。の。近。習。青。侍。と。共。侶。小。主。君。を
 守護。退。き。齊。く。屏。風。の。陰。に。在。り。又。局。の。左。右。の。排。列。する。警。言。固。の。走。卒。敬。馬。噪。り。持。り
 棒。も。の。甲。斐。る。送。り。人。を。背。か。し。咸。一。固。に。做。れる。況。局。の。隅。に。土。坐。る。骨。董。經。紀。祿。齋
 屋。余。市。の。事。の。異。変。を。胆。で。洩。し。七。二。霎。時。に。堪。ぞ。外。面。邊。出。ん。と。欲。ま。る。出。口。を。失。ひ。跌。倒。れ。て
 一聲。苦。と。叫。び。も。果。ぞ。と。儘。氣。絶。あ。り。け。介。程。の。虎。の。連。り。の。哮。狂。ひ。て。幾。層。の。人。を。傷。り。け。ん
 衝。と。走。出。る。時。異。風。の。首。を。衝。て。驚。直。の。又。敬。言。固。の。走。卒。を。駈。倒。し。蹂。躪。り。て。身。を。跳。ら。し。高
 堀。を。閃。り。と。踰。る。と。見。る。程。不。往。方。へ。知。る。の。み。け。り。這。時。力。士。の。頭。人。を。種子。嶋。中。太。正。告。鬼。平。五
 辛。く。命。を。免。れ。な。む。力。士。過。半。傷。ら。れ。て。半。死。半。生。る。も。な。む。け。虎。を。逐。ふ。死。擬。勢。あり。と



台ニ
 畫虎是
 不畫巽
 風喪元

又只力士門のこゝろ有司の傷見あり。走卒も亦幾名歿或ハ虎ハ傷られ或ハ又蹂躪ら
 して血塗れるも跡を有侍り。程政之猛虎のあらざりしを見て摩て生る心地ら
 側は復た復た向て却未曾有の珍事ある。那虎那里にけん。尚又多く人を傷
 け又公私の憂ひ。又中太鬼平五等。おの餘も武勇の者。課て弓箭鑊銃の煥煉
 ある。殿兵八四四名を従せ。八方部七と多く虎を獵捉せ。意ふ高きせ。越我
 邸内ハ在らざる。洛内市中横行其我失と人皆えおのまを先急ぐ。次ハ瘦を
 士卒等宜く勤り宿所へ還し。療養を剛おまへ。宣定近習を従て。馳と奥
 入りける。現興あれ。意氣揚々。奥盡ぬ。宵臆恒々奇行ある者。必奇禍あり。又鬼
 神を侮れ。竟鬼責る。政元異風同轍。其妖孽の齊く。猶幸と
 同話休題。介程ハ香西復六。とや件の下知を傳へて。正告景紀を尋遣
 又恙なれ有司等。ハ別ハ士卒を召聚令。死人と傷瘡見せ出。る。事ハ紛乱の

今もあま。その中ハ祿齋屋余市ハ氣絶せ。の。身ハ傷られ。姑且と我復り。杖ハ
 携り。辛くと宿所ハ届る。と。大驚心。破り。宵。又發熱。七。五日
 起。然。又種子嶋中。太正告。紀内鬼平五景紀。猛可。殿兵數十名。従て。弓
 箭鑊銃の準備足さ。先郎中せ。巡りて。件ハ虎を索る。孰里に於けん。知者
 あ。是。又虎獵の頭人。を加え。各列卒を多く。四方ハ分。立。出。洛内洛外
 隈も。夜。日。の。影。其。影。去。向。の。地方の民。問へ。も
 見。者。候。而。の。次。の。日。の。已。牌。時。候。種子嶋。正告。二隊の士卒。洛外東の申
 明亭を過る。程ハ人。居。立。在。何。人。瞻仰。あり。正告。を。誣。て。殿兵。其。衆。令
 拂。立。て。是。を。觀。る。小島。て。久。一。男子。の。生首。一級。梟首。組。載。せ。あ。
 晴。定。を。猶。熟。視。る。怪。哉。此。是。昨日。那。虎。が。銜。去。り。け。竹林。異。風。の。首。級。され。ま。
 什麼。と。い。ふ。ち。驚。駭。れ。在。り。ける。程。鄙。備。一。個。の。行。客。あり。俱。ハ。站。ま。首。級。現。て。

側多入告るやう己ハ丹波の末田なる某師院の村民でいふの鼻取られる罪人我村
 繪額經紀箕利屋異と喚做る奸悪人にていひまふ那奴這秋の時候箇様
 箇様の情申あて友を殺し妻を誣て伴誑の貽簡を留措き刺その友の錢財衣裳を
 奪略して夜の紛きて亡命あけよ隨即領事仰ふよりて久く往方を索ねり竟に
 知より入り果して天罰免れどして住る死状を做する那故箇様々と異於免す
 不義の顛末始ハ長門より流寓来て九里平の迹と継ぎし他們が羊表半裏けり
 羊來の行狀並ハ樵夫樵なる且奇き行童ある又金岡の画の虎の都て他們奸
 虐の秘支の村民是を知らざり小往日於免子の冤魂と市巫の弦の向せハ隱匿
 竟の發覺れと云其大略と解示其聽卑存一駭歎して不思議なると思ひける然
 種子嶋正告も料ど件の一奇談と聞いて既の便宜をぬれ公する行文を喚禁
 うち向ひて目今爾が問語して這竹林巽風の來歴と聞知る酒家ハ西陣なる管領の

御内人種子嶋中太正告是ハ原來這巽風ハ丹波の末田の多人あり故昨日那奴來り
 金岡の画の怪虎の往方を索ねて捉鎮めよとある君侯の仰ふ我黨五六隊四方
 部て涉獵れども虎の往方を知らざるて反て虎ハ銜去られ巽風の首級をの料
 ども今あは見ぬ亦是奇中の一奇事にて実ハ天罰なるか那巽風ハ横死せり金
 岡の画の虎の眼ハ點せ異亦あふれりその故ハ箇様々とその崖略と解示して有はれ爾を
 召俱して邸に還りて巽風の來歴を聞する君侯の御疑ハ立地ハ氷解せん酒家の從之
 參るべしといれて行客頭を搔て開ハ亦思ひける事多漫ハ是暗きより連累せら
 其争何せんいそ鏡さむか勤解る正告聞あは何ぞ介る事あるを名と名く立ねと
 いそと殿兵下知と行客と守らるに従ハて馳てあより又引返して西陣へいれける是より
 衆人ハ那画虎の怪談と巽風ハ奸悪を憶き聞知りて且驚き且怪共ハ口順ハ做さる
 あの度日るまで四方の聞えて駭怕するはるるけり介程種子嶋正告ハ那行客をば西陣



八ノ傳心車卷三十一

三十二

文安堂

首級



八ノ傳心車卷三十七

文安堂

身。邸うう行程不隸らるる殿兵兩名の左右に立て由断るる怪び下行客の檢消せど見
 えどるりけり。殿兵は是の胸を凌ぎ吐嗟と叫べ正告も驚きて俱不見るる現行客の
 在らざるの原來那奴も變化あり一飲不思議を々々をり呆れて一霎時去るるを
 却己死のあざされ只得西陣のうり来て隨即主君政元不件の事の趣を具の聞え上るる
 政元も亦訝りて然ら丹波の某師院村へ早く謀使を遣して異風が来歴を素生を質
 問する如きと。猛可の兩個の走卒小吩咐て件の村へ遣せしも毫も顔でいそがれん
 才の三日許の程の間謀使等々う来て僕等某師院の村民の尋問ける。異風が免子
 熊六が事の顛末の固様々々いひの言嚮那行客の不同語の啗合いければ政元憶を
 歎息志て介らふ事の実事那行客の非なり。神飲佛の化現飲と思難の思を疑はるる
 解りけり。有餘り一程の紀内景紀門五六名虎獵の頭人各列卒を従ては空しくか
 来り主君の聞え上るる。臣等も三四月洛内洛外三里四方を隈もくうち巡りて那

虎と素ねいひの地其地の民も見きとの者いひ攻据もくいこの義を稟上んと
 退りいとの政元これと聞て然もそあらぬ自ら正告の隊に侍る奇事あり。意ふ那
 虎の出暴れ折外面へ去るきと見し幻の故の初軸をかへりけり。ち閉きて疾見よと
 則近習小吩咐那画軸を出せ見ると尚素絹の虎の一匹は是抜出よう。いも絹
 へかざる。他尙遠く去らる。息へ胸猶休る。一日二日と過ぎ程洛中猛可の風聲
 あり。昨宵白川山中虎の起る者あり某甲辛くして逃て才命を免れ某て咬れり。この
 のと虚実分明をう。小の次の日白川の山里の村長並石匠等詰来て訴稟する。素
 させのと聞え。那奇き唐獸の我山中の躰を在り晝も山を踰る者一路見寡き。那
 虎の撞見て命を喪ふ者これあり。あの故の本村の男女駭怕は村者八隊と定めて虎を防ぐ
 準備不他事。宿所の各戸を閉て活業せられ。飢餓及んとす。早く獨戸の仰付させ
 虎害を除せぬと連署の願書せり。只曾の請稟を。政元いよ。敬篤真愛の近察

對治せらるべし。其村民を宿所へ還し。其後又香西復六と有司們を聚合し。連
 了衆議を擬せども。大家計の出る所あり。先洛外なる藪戸の課て件の虎と退治
 せんとす。藪戸を召聚へて。募る小賞錢と重くまじども。藪戸等ハ悦び。皆辭ひ
 稟まき。非如猛獸なりとも。熊狀狼形の獸捉るべし。他ハ熊狼より猛
 十倍せる。唐山の惡獸にて。且肉身の者多き。故に名画の天ありて。抜出るべし。前
 砲の及ぶべくもい。其其ハ饒さぬ。異同様の流り。有司等聽き。頭を掉て
 若們國恩を載て。安く宅眷を養ひ。候も時御用の達。感活業を召放ちて。地を
 追放せらるべし。然ども御説に従ひ。と眼を瞑らして。權志一ハ藪戸等ハ困り。果て只
 得言兼して。退りける。中ハ血氣壯中。名聞を好む。或ハ賞錢の多き。利と
 命をたぐらざる者。毎敢那虎と怖ま。ての。他ハ原是故。言画の妖。うま。ん。を
 と。焼ん。各俱ハ大鏡と火。某と。ま。く。準備七。藪一。藪。て。試。と。連り。ハ。薦。て。已。り。

け。其。大家。これ。將。大。き。で。然。左。右。せ。んと。隊。と。立。暗。號。と。定。り。各。火。某。腰。餉。の。準備
 あり。鎧。砲。竹。槍。列。卒。繩。と。携。て。白。川。山。の。攀。登。り。件。の。虎。と。涉。獵。り。一。晝。夜。不。及。ぶ
 まで。虎。ハ。遇。さ。る。隊。も。あり。或。ハ。虎。と。見。出。て。連り。ハ。鎧。砲。放。懸。れ。ども。虎。ハ。これ。と。物。も。甚。だ
 縦。横。無。算。に。走。り。蒐。り。て。其。藪。戸。等。と。噬。倒。を。勢。ひ。中。る。べ。し。あ。ら。ざ。れ。ば。準備。悉。相。違
 えて。矢。場。不。命。と。喪。ふ。者。あり。幸。ひ。一。七。死。き。り。も。傷。ら。れ。脚。を。折。せ。て。半。生。半。死。あり
 ぬ。も。ま。け。れ。ば。い。ま。虎。ハ。遇。さ。る。藪。戸。等。も。怖。ま。て。久。く。休。め。ど。大家。山。を。逃。下。り。て。巴。提。便
 姓。氏。ハ。短。劍。馮。婦。博。一。都。が。一。卷。不。做。んと。欲。さ。る。者。あり。其。故。ハ。其。隊。毎。の。故。老。們。俱
 政。元。の。郎。小。讀。事。仕。と。想。て。復。催。促。不。從。は。是。より。風。聲。買。と。あ。り。那。虎。昨。宵。ハ
 林。麓。下。り。て。聖。護。院。の。木。林。不。在。り。明日。日。枝。の。山。を。遷。ん。秋。東。山。の。御。所。の。頭。も。心。許。る。
 倘。亦。那。虎。智。茂。河。を。う。り。渡。り。て。洛。中。を。横。行。其。禁。裡。御。所。棋。家。官。方。花。の。御。所。と
 稟。ま。とも。防。禦。易。ら。ら。る。と。罵。噪。ぐ。程。小。寺。院。の。尼。姑。及。坊。間。の。婦。幼。們。ハ。今。ハ。虎。の

出来り如く戰慄して昏るも門戸を閉て潜居り然ぞ神祇伯陽家へ惡獸對治良賤
 鮮厄の祈禱あり又叡山出の塔の大衆詮議して武を嗜む暴法師の鏃を磨き武具を
 準備して虎備入る射て捉んとても柄膏引て疾もあり然らぬ猛虎調伏の讀經の暇も
 ける修法の亦只是のまゝ洛内洛外の神社を爲す皆丹精を抽く祈らざるはたりの
 ら法験感応いせし聞えども故の管領島山政長へ將軍家議尚の仰より二百許の士
 卒を領て東山殿と守護なり他の他在京の武士の課で内裡並花の御所
 守らるる且管領政元は妖虎の由来を尋ねるひて早く對治の計議を旋りその
 器小勝る勇士を擇り藤を鎮り民を拘て上下安堵の大功を要し奏せども辰襟様も
 へるに聞ふ這回の妖孽又京兆政元奇を好る遊戯より事起りてあふ至る尙對治
 遲滞其身の爲宜かざるぞと緊しく責さるひて政元痛く畏りて且羞且焦燥で
 おりまう始骨董經紀余市奴が刑餘のち人異風を汲引て那旁軸の内覽を請ふれ

あそ這妖孽へ起りこれ有はれば是の罪の則異風と余市に在りて中の異風の積不
 善の天誅予がもを俟て風く首級を梟られ先や余市を罪として召捕せ首を刎て
 人口を塞ぎ我上後安らんと尋思を志す有司の命にて猛可余市を召捕て罪を
 倡て斬首の刑を行ひけり現苛政は虎より酷いものなる古人の格言思ふに然ぞ這録齋
 屋余市も亦是好人のあむまの時の方て東山殿奢侈を次ふして茶器奇石故書画の
 類都てぬが死貨を弄びるふよと骨董と宗と其經紀旧の毎の利を射るを
 就中這余市は政元の親よりけは東山殿の求むる東西といへば人の譲らば并て政元の
 勉て那家の權宰する香西復六の餘の有司も時々人情を厚くして上下の資助を
 ありあそも其利火計の經紀見は十倍されも尚飽を出所不正の東西と知り買
 する賈も志され資助宜しけむ其崇はあそ漸々小家優を奴婢とある高上までの

和漢新故の珍器珍物あはれきあはれものを積たむるに庫くらあり。盈あふれ、虧くる天理てんりを知らず。御史ごし出所しゅしよ詳あやむら異風いふうを家いへに留とどめ利りを欲ほむ。故ゆゑに画え出して病やまひ、病やまひ愈よて起たり。日ひに那身なみの召捕めいほられて首くびを喪なす。家庫財宝けくらざいほう没官ぼつくわんせむ。宅たく着ちやくの追放おひなげせられけり。然しかに、人ひとの預あづけ、餘財よざいを二百金にひゃくきんあつけれ、余市よいちが獨子ひとりご某たがひて是こゝに抱かかりて母ははと共ともに近ちかく走はりて名なを變かへて小社せうしゃの神主かみに做なりて子孫こぞんを相續あひつぎせり。是こゝは後の話のちのわたり、現汝げんには出でて汝に返かへる善惡ぜんあく心報しんぱうの理ことのみ、只ただ這經こゝ紀きの事ことを始はじめに、那虎なこの暴出はうしゅつ折或せつあは命いのちを喪なす。或あるは疾やまひを蒙ありける。有ありて、司つかさどり力ちからを走はりて、卒つひに其後そのち又また白川しろがは山やまに那虎なこの傷やまひられ、行客ぎやくを良よく獲とりて、皆みな是こゝに忍しのみ、貪あまみ、焚やす。不孝ふけう、不義ふぎの毎まに、好人こうじんの個こゝも、且かつ善人ぜんじんの那なを夜よに艾あふ越こえ、虎この撞つき見みせ、有あり。是こゝは靈獸れいぶつ之世のよの民たみの父母ふぼを者ものとす。仁に政せいを行おこなひ、多おほく征せいせ、上かみに那虎なこの必出かならずせざるべし。識者しきしや批評ひひやく聞きく、宣のたまふ。政元せいげん、其言そのことばを迂遠うゑんにして、敢用あやまりて、身みを非ひと飾かり、人ひとを屠とる。其の像かたち、經き紀き、余あり。市いちに誅戮しゅりやくを、後のちの話わたり、説ことば甚おほく、麻あを、不ふ開ひらか、卷まを改かめて、是こゝより又また下の回したのまわに解とけ、分わる。聴きね、か。

南總里見八犬傳第九輯卷二十七終

